

## まえがき

本書『東アジア古文書学の構築：現状と課題』は、ここ 10 年間ににおける共同での研究成果をとりまとめたものである（なお、ここで東アジアとは漢字文化圏（ベトナム-中国-朝鮮半島-日本）を指す）。

この間、調査研究のために以下の補助金・助成金を活用させていただいた。研究メンバーを表して関係各位に御礼申し上げたい。

- ① 「東国地域及び東アジア諸国における前近代文書等の形態・料紙に関する基礎的研究」（日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（A）、課題番号：20242016、研究代表者：山本隆志・筑波大学、研究年度：2008-2011）
- ② 「近世文書料紙の形態・紙質に関する系譜論的研究」（日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（B）、課題番号：25284129、研究代表者：本多俊彦・高岡法科大学、研究年度：2013-2016）
- ③ 「中国古文書学の基礎研究：東アジア古文書学構築のために」（りそなアジア・オセアニア財団研究助成、研究代表者：小島浩之・東京大学、研究年度：2015-2016）
- ④ 「東京大学史料編纂所所蔵東アジア関係古文書資料の調査・研究」（東京大学史料編纂所・共同利用・共同研究拠点一般共同研究、研究代表者：小島浩之・東京大学、研究年度：2015-2016）
- ⑤ 「情報化時代における新たな史科学構築の可能性：『唐六典』を例として」（日本学術振興会・科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究、課題番号：15K12938、研究代表者：小島浩之・東京大学、研究年度：2015-2017）
- ⑥ 「和紙技術・文化論の再構築をめざして：多言語による記録と伝世資料の比較検討による学際的研究」（公益財団法人サントリー文化財団人文科学、社会科学に関する学際的グループ研究助成、研究代表者：本多俊彦・高岡法科大学、研究年度：2017）

①の山本科研は、編者が古文書学とはじめて接点をもったものであり、古文書学の考え方や手法について日本史研究者の方々から大いに鍛えていただいた。と言えば格好が良いが、実際には議論についていくのもやっとの状態で、この時点では本書のような成果につながるなどとは夢にも思わなかった。山本科研の研究テーマには、日本の古文書と東アジアの古文書との比較検討が掲げられており、編者もメンバーとして加えていただくことになった。この科研で日本中世史・外交史の橋本雄氏とともに、東アジア研究班と称して小規模な活動を行うようになったのが、本書成立の機縁であったと言えるだろう。

同様に②の本多科研でも、東アジア古文書との比較という視点が受け継がれ、橋本雄・藤田励夫の両氏とともに、東アジア古文書担当として各種の古文書調査をする機会にめぐまれた。このころになると、編者もようやく調査のイロハを覚え、中国古文書学研究の研究史をまとめたり、方法論的な課題を整理したりというように、自ら進んで古文書学的な研究のまねごとをはじめた。

山本科研や本多科研では、染織研究者の河上繁樹氏、修復技術者の高島晶彦氏など、歴史資料をモノとして取り扱う研究者から手ほどきを受ける機会にも恵まれた。この二つの科研を通じて学んだ日本の古文書学の最新の成果を、何とかして東アジアの古文書に応用できないかと考えて応募した助成金が③と④である。いずれも現物調査をできる限り行い、特に料紙について総合的に研究することで一つの成果を見いだそうとしたものである。④は、東京大学史料編纂所の所蔵する古文書原本や、古文書が写された古写真の調査を行ったものであるのに対して、③は国内各所に点在する東アジアの古文書について選択的に現物調査を実施したものである。④の共同研究では、須田牧子氏と黒嶋敏氏に東京大学史料編纂所側の受入教員としてご尽力いただいた。

⑤では、『唐六典』という唐代の律令格式のエッセンスをまとめた資料を解説しているが、その過程で文書行政に関わる具体的な史料を精読する機会に恵まれた。具体的な古文書調査から得られた知見を制度の資料の記述と対応させ、成果をとりまとめることができたのは、この科研に負うところが大きい。また⑥では、紙譜と呼ばれる紙見本の調査や、外国語文献にみられる東アジアの紙の記述の研究など、これまでに扱ったことのない資料との格闘が続いている。

紙幅の関係から逐一尊名を掲げられないが、①から⑥までの各研究班の参加者や、ご意見をいただいた方々にも紙上から御礼申し上げたい。また、これまで東アジア関係の所蔵古文書について熟覧や調査に協力いただいた主な機関は、以下の通りである。ここに機関名を掲げて深甚の謝意を表すとともに、本書で全ての機関での調査結果を採り上げられなかったことをお詫びしたい。

上杉神社、大阪歴史博物館、沖縄県公文書館、沖縄県立美術館・博物館、関西大学図書館、京都大学附属図書館、九州国立博物館、宮内庁書陵部、熊本県立美術館、相国寺、相国寺承天閣美術館、仙台市博物館、東京大学史料編纂所、東京大学総合図書館、東京大学東洋文化研究所、徳川美術館、ファナック株式会社、毛利博物館、山口県立博物館、米沢市上杉博物館（五十音順）

この間、編者の勤務先である東京大学経済学部資料室でも、資料保存の研究の一環として現物資料の料紙調査や分析は当然の課題となった。この中で、本多俊彦氏や高島晶彦氏からは様々な助言・協力を受け、同僚である矢野正隆・森脇優紀・富善一敏・小山萌の各氏には、日々の議論を通じて多くのことを学ばせていただいた。心より感謝申し上げたい。

このように本報告書は多くの方々の協力による共同の成果であって、決して編者一人によるものではない。そのなかでも、編者なりにこの10年の歩みをまとめると、上述のように、日本古文書学の理論・方法論の東アジア古文書学へ応用から、東アジアの古文書の国内所在調査と具体的な料紙調査につながり、これらの成果を踏まえた制度史文献との比較研究を行ったことで、ようやく本書にたどり着いたということになる。

『東アジア古文書学の構築：現状と課題』と題してはみたものの、これだけで東アジア古文書学が構築できるはずもなく、構築のためにはどうすればよいか、いまだに彷徨しているのが現実である。本書はひとまずの中間報告書として、大方の批正を賜れば幸いである。

平成30年1月

小島 浩之